

博士論文(要約)

論文題目 大名華族としての島津家の誕生—明治前中期における華族の生成と展開—

氏 名 寺尾 美保

目次

序論

| | |
|---------------------------------|----|
| 第一章 問題の所在 | 1 |
| 第一節 「華族」という概念と実体 | 1 |
| 第二節 明治二〇年代の華族としての島津家 | 6 |
| 第二章 課題と方法 | 10 |
| 第一節 華族研究における時期的変遷 | 10 |
| 第二節 政治史・経済史の中の一要素としての華族研究 | 11 |
| 第三節 華族史料を用いた近年の華族研究 | 15 |
| 第四節 研究の方法 | 18 |
| 第三章 対象と構成 | 19 |
| 第一節 用語の定義 | 19 |
| 第二節 研究対象 | 22 |
| 第三節 本研究の構成 | 23 |
| 第四節 華族史料と島津家の史料について | 25 |

本論

| | |
|------------------------------|----|
| 第一部 草創期の華族 | 33 |
| 第一章 華族という意識の形成 | 36 |
| はじめに | 36 |
| 第一節 久光にとっての華族 | 38 |
| 一 玉里島津家誕生と久光の反応 | 38 |
| 二 久光にとっての分家と位階 | 41 |
| 第二節 華族の東京移住についての島津家の対応 | 45 |
| 一 廃藩置県と華族の居住 | 45 |
| 二 島津家と東京・鹿児島 | 46 |
| 三 明治初期における華族と旧領地 | 48 |
| 第三節 華族会館と島津家 | 50 |

| | | |
|-----|-----------------------|-----|
| 一 | 島津久光と華族会館 | 50 |
| 二 | 島津忠義と華族会館 | 52 |
| 三 | 西南戦争と会館加盟 | 55 |
| 四 | 華族としての島津忠義 | 57 |
| | おわりに | 61 |
| 第二章 | 華族にとっての十五銀行開業と投資の原点 | 69 |
| | はじめに | 69 |
| 第一節 | 華族にとっての株式投資の意義 | 71 |
| 一 | 華族の資産への期待 | 71 |
| 二 | 秩禄処分から「華族共同銀行」設立 | 73 |
| 三 | 華族への指導と説明 | 74 |
| 第二節 | 「株式姓名表」と「創立証書」 | 80 |
| 一 | 十五銀行早期開業と華族 | 80 |
| 二 | 開業前後の株主の検討 | 82 |
| 第三節 | 十五銀行開業前後における華族の所有株の移動 | 106 |
| 第四節 | 島津家と十五銀行 | 113 |
| | おわりに | 117 |
| 第三章 | 廃藩置県後の島津家と鹿児島県 | 124 |
| | はじめに | 124 |
| 第一節 | 廃藩置県後の島津家と鹿児島県 | 125 |
| 一 | 島津家への年始の挨拶 | 125 |
| 二 | 島津家における鹿児島県批判 | 128 |
| 三 | 西南戦争後の鹿児島調査 | 130 |
| 第二節 | 西南戦争後の島津家と第五銀行 | 133 |
| 一 | 廃藩置県の未処理金と第五銀行 | 134 |
| 二 | 第五銀行の大株主 | 135 |
| 三 | 島津家の資産保全と管理 | 138 |
| | おわりに | 141 |
| 第四章 | 明治初期における島津家の鉱山経営 | 147 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| はじめに..... | 147 |
| 第一節 明治前中期における鉱山の経営主体 | 149 |
| 第二節 明治期島津家による鉱山経営の発端 | 153 |
| 一 三鉱山の来歴..... | 153 |
| 二 官有か島津家か..... | 155 |
| 三 島津家にとっての鉱山借区権 | 159 |
| 第三節 山ヶ野金山経営と資金調達の困難 | 161 |
| 一 山ヶ野金山の推移..... | 161 |
| 二 P. オジェの招聘と資金調達 | 162 |
| 三 P. オジェによる改革の困難 | 165 |
| おわりに..... | 169 |
| 第一部 小括..... | 176 |
| 第二部 大名華族としての島津家の家政改革 | 180 |
| 第五章 明治一〇年第一における家政の諸問題 | 184 |
| はじめに..... | 184 |
| 第一節 明治一五年の鉱山調査 | 186 |
| 一 鉱山事業の状況把握 | 186 |
| 二 山ヶ野金山の景況と島津家の経済状況 | 188 |
| 第二節 職員の現状認識と鉱山売却案について | 193 |
| 一 有村国彦建言書..... | 193 |
| 二 東郷重持建言書..... | 197 |
| 第三節 島津家職員の家政改革案 | 200 |
| 第四節 松方正義の顧問就任 | 213 |
| おわりに..... | 216 |
| 第六章 松方正義による会計改革 | 219 |
| はじめに..... | 219 |
| 第一節 会計史料について | 220 |
| 第二節 二二年前後の島津家の家政と会計管理 | 222 |
| 一 「家憲」 | 222 |
| 二 「職務規程」と「会計規則」 | 224 |

| | |
|--------------------------------------|-----|
| 三 担当者と顧問と銀行 | 226 |
| 第三節 帳簿からみる会計管理 | 229 |
| 一 収入 | 235 |
| 二 支出 | 235 |
| 三 帳簿の費目 | 236 |
| 第四節 予算の開始と最初期の予算作成 | 237 |
| 一 予算の開始 | 237 |
| 二 最初期の予算作成 | 239 |
| 三 経費把握の方法 | 245 |
| 第五節 予算作成に対する意見交換 | 248 |
| 第六節 予算と決算の比較 | 253 |
| 第七節 株式投資のための組織と資金調達 | 255 |
| 一 日鉄株売却による資金調達 | 255 |
| 二 株式投資のための組織 | 262 |
| 三 十五銀行の特別配当金 | 263 |
| おわりに | 265 |
| 第七章 島津家における鉱山事業と十五銀行 | 270 |
| はじめに | 270 |
| 第一節 鉱山事業の中断と再開 | 272 |
| 第二節 鉱山資本拝借金について | 277 |
| 一 鉱山資本拝借金 | 277 |
| 二 拝借金残金の支払い | 278 |
| 第三節 鉱山資本拝借金の返済 | 281 |
| 一 拝借金年賦返納願 | 281 |
| 二 旧商通社御貸上金御下戻願 | 282 |
| 三 世襲財産法と十五銀行株券 | 284 |
| 第四節 島津家の世襲財産 | 288 |
| おわりに | 291 |
| 第八章 島津家における磯邸(鹿児島)と袖ヶ崎邸(東京)の意義 | 294 |
| はじめに | 294 |

| | | |
|------|-----------------------|-----|
| 第一節 | 明治一七年磯邸の建替について | 295 |
| 第二節 | 明治二一年島津忠義貫族願について | 301 |
| 第三節 | 島津忠義帰鹿の時期について | 303 |
| 第四節 | 島津家における鹿児島と東京 | 314 |
| | おわりに | 316 |
| 第二部 | 小括 | 319 |
| 第三部 | 大名の歴史をめぐる家史編纂と国史編纂 | 323 |
| 第九章 | 旧大名による「国事鞅掌」始末取調 | 331 |
| | はじめに | 331 |
| 第一節 | 「国事鞅掌」始末取調の顛末と編纂の課題 | 333 |
| 一 | 明治二一年の特命とその失敗 | 333 |
| 二 | 延期の理由と編纂材料 | 334 |
| 三 | 島津家の成果と終わらない編纂 | 337 |
| 第二節 | 二つの編纂物 | 340 |
| 一 | 提出時期と提出物 | 340 |
| 二 | 新たな編纂と家政改革 | 343 |
| 三 | 島津家・毛利家・山内家・徳川家の刊行物 | 346 |
| 第三節 | 市来四郎の目指した家史編纂 | 348 |
| 一 | 市来四郎と島津家の家史編纂 | 348 |
| 二 | 島津久光の目指した家史編纂 | 352 |
| 三 | 市来四郎の編纂員としての経験と成長 | 354 |
| | おわりに | 357 |
| 第一〇章 | 帝国大学文科大学史料編纂掛からみる大名華族 | 363 |
| | はじめに | 363 |
| 第一節 | 明治政府の国史編纂 | 364 |
| 第二節 | 史料編纂掛の史料採訪 | 368 |
| 一 | 府県への目録提出要請 | 368 |
| 二 | 府県への出張 | 372 |
| 第三節 | 華族の所蔵史料への接近 | 375 |
| 一 | 「家譜」などの編纂物からの接近 | 375 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| 二 華族から閲覧要請や情報の共有 | 378 |
| 三 旧領地への採訪 | 379 |
| 四 史談会 | 384 |
| 第四節 『島津家文書』をめぐる鹿児島と東京 | 385 |
| おわりに | 391 |
| 第三部 小括 | 394 |
| 結論 | |
| 一 家史に連なる華族の歴史 | 398 |
| 二 大名と華族の複眼的思考 | 402 |
| 三 展望 | 406 |
| 参考文献 | 408 |

本文

5年以内に出版予定。

参考文献

- 阿多澆『島津左府公伝』, 私家版, 1897年
- 阿部武司・中村尚史編著『講座・日本経営史2 産業革命と企業経営－1882～1914－』, ミネルヴァ書房, 2010年
- アラン・シャンド著, 大蔵省 [訳]編, 『銀行簿記精法』, 雄松堂書店, 1979年
- 池田さなえ『皇室財産の政治史－明治二〇年代の御料地「処分」と宮中・府中－』, 人文書院, 2019年
- 池田勇太『維新変革と儒教的理想主義』, 山川出版社, 2013年
- 石井寛治『日本経済史第二版』, 東京大学出版会, 1991年
- 石井寛治『経済発展と両替商金融』, 有斐閣, 2007年
- 石村善助『鉱業権の研究』, 勁草書房, 1960年
- 維新史料編纂会編『華族略譜稿本』, 国書刊行会, 1974年
- 板垣退助『一代華族論』, 社会政策社, 1912年
- 市来四郎「丁丑擾乱記」, 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 西南戦争』1, 鹿児島県, 1978年
- 内山一幸『近代における旧藩主家文書の基礎的研究－「旧柳河藩主立花家文書」の検討を中心に－』, 九州大学比較社会文化研究院歴史資料情報講座, 2004年
- 内山一幸『明治期の旧藩主家と社会－華士族と地方の近代化－』, 吉川弘文館, 2015年
- 浦島幸世『金山－鹿児島は日本－』, 春苑堂出版, 1993年
- 大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』下, 東京大学出版会, 1975年
- 大内兵衛・土屋喬雄編「貨政考要」, 『明治前期財政経済史料集成』13, 明治文献資料刊行会, 1964年。
- 大内兵衛・土屋喬雄編, 『明治前期財政経済史料集成』11, 明治文献資料刊行会, 1964年
- 大久保利謙『大久保利謙歴史著作集3 華族制の創出』, 吉川弘文館, 1993年
- 大蔵省編『工部省沿革報告』, 大蔵省, 1889年
- 大島信蔵編著『大島高任行実』, 大島信蔵, 1938年
- 岡部牧夫・小田部雄次編『華族財産関係資料』上・下, 不二出版, 1986年
- 岡山県教育会編『岡山県教育史』中, 岡山県教育会, 1942年
- 奥田晴樹『日本近代の歴史1 維新と開化』, 吉川弘文館, 2016年

刑部芳則『洋服・散髪・脱刀―服制の明治維新―』, 講談社, 2010年

刑部芳則『明治国家の服制と華族』, 吉川弘文館, 2012年

刑部芳則『京都に残った公家たち―華族の近代―』, 吉川弘文館, 2014年

小田部雄次『家宝の行方―美術品が語る名家の明治・大正・昭和―』, 小学館, 2004年

落合弘樹『秩禄処分―明治維新と武士のリストラ―』, 中央公論新社, 1999年

小野芳朗他編著『近代』, 思文閣出版, 2018年

小葉田淳『鉦山の歴史』, 至文堂, 1956年

小葉田淳『日本鉦山史の研究』, 岩波書店, 1968年

小葉田淳『続日本鉦山史の研究』, 岩波書店, 1986年

小葉田淳『貨幣と鉦山』, 思文閣出版, 1999年

海江田信義口述・西河称編述『維新前後実歴史伝』(続日本史籍協会叢書), 東京大学出版会, 1980年

学習院大学史料館編『旧華族家史料所在調査報告書』, 学習院大学史料館, 1993年

鹿児島県編『鹿児島県史』2~4, 鹿児島県, 1940~1943年

鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 忠義公史料』1~7, 鹿児島県, 1974-1980年

鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録追録』6・8, 鹿児島県, 1976・1978年

鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 西南戦争』1~3, 鹿児島県, 1978~1980年

鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 島津斉宣・斉興公史料』, 鹿児島県, 1985年

鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 大久保利通史料』1, 鹿児島県, 1988年,

鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 玉里島津家史料』1~10・補遺 南部弥八郎報告書, 鹿児島県, 1992~2003年

鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集』1・4, 鹿児島県, 2004・2007年

鹿児島県歴史資料センター黎明館編『奇跡の至宝「島津家文書」―薩摩七〇〇年の歴史が見える―』, 鹿児島県歴史資料センター黎明館, 2000年

鹿児島市史編さん委員会編『鹿児島市史』2, 鹿児島市, 1970年

笠谷和比古『主君「押込」の構造―近世大名と家臣団―』, 平凡社, 1988年

霞会館編『華族会館史』, 霞会館, 1966年

霞会館編『貴族院と華族』, 霞会館, 1988年

霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』, 霞会館, 1986年

霞会館華族資料調査委員会編『霞会館百三十年の歩み』, 霞会館, 2004年
霞会館華族資料調査委員会編『会館百四十年の歩み』, 霞会館, 2014年
霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成』上・下, 霞会館, 1982, 4年
霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成別巻－華族制度資料集－』, 霞会館, 1985年
勝田正治『〈政事家〉大久保利通－近代日本の設計者－』, 講談社, 2003年
勝目清『勝目清回顧録－鹿児島市秘話－』, 南日本新聞社, 1964年
加藤俊彦・大内力編『国立銀行の研究』, 勁草書房, 1963年
金子厚男『『末松謙澄と「防長回天史」』, 新潮社, 1980年
株式会社島津興業企画審査室編『四十年史』, 株式会社島津興業, 1962年
川越明編『明治に於ける都城島津家日誌』1～5, 島津久厚, 1980～1984年
芳即正『島津斉彬』, 吉川弘文館, 1993年
芳即正『日本を変えた薩摩人－鹿児島と明治維新－』, 春苑堂出版, 1995年
芳即正『島津久光と明治維新－久光はなぜ倒幕を決意したのか－』, 新人物往来社, 2002年
近代日本研究会編『幕末・維新の日本』, 山川出版社, 1981年
宮内庁編『明治天皇紀』2～3, 吉川弘文館, 1969年
宮内庁編『明治天皇紀』4, 吉川弘文館, 1970年
宮内庁編『明治天皇紀』7, 吉川弘文館, 1972年
久保正明『明治国家形成と華族』, 吉川弘文館, 2015年
久保田栄『華族論』, 牧野書房, 1890年
久米邦武著・中野礼次郎等編『久米博士九十年回顧録』上・下, 早稲田大学出版部, 1934年
鉦山懇話会編『日本鉦業発達史』上・中・下巻, 1932年, 〈復刻版〉『明治百年史叢書』414～419巻, 1993年
国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』, 岩波書店, 1988年
五代龍作『山ヶ野金山鉦業誌』, 山ヶ野金山鉦業館, 1910年, 〈復刻版〉『明治前期産業発達史資料』別冊73, 1970年
五代龍作『芹ヶ野金山鉦業誌』, 公爵島津家鉦業館, 1911年, 〈復刻版〉『明治前期産業発達史資料』別冊73, 1970年
後藤致人『昭和天皇と近現代日本』, 吉川弘文館, 2003年
小林和幸『明治立憲政治と貴族院』, 吉川弘文館, 2002年

小林健寿郎編著『越前松平試農場史』, 松平宗紀, 1993 年
小林正彬『日本の工業化と官業払下げ—政府と企業—』, 東洋経済新報社, 1977 年
小林正彬『三菱の経営多角化—三井・住友と比較—』, 白桃書房, 2006 年
近藤斉『近世以降 武家家訓の研究』, 風間書房, 1975 年
三枝博音・飯田賢一『日本近代製鉄技術発達史—八幡製鉄所の確立過程—』, 東洋経済新報社,
1957 年
榊原喜佐子『徳川慶喜家の子ども部屋』, 草思社, 1996 年
酒巻芳男『華族制度の研究—在りし日の華族制度—』, 霞会館, 1987 年
坂本多加雄『明治国家の建設』, 中央公論社, 1999 年
佐倉市史編さん委員会編『佐倉市史』2, 佐倉市, 1973 年
佐々木克『大久保利通と明治維新』, 吉川弘文館, 1998 年
佐藤宏之『近世大名の権力編成と家意識』, 吉川弘文館, 2010 年
史学会編『歴史学の最前線』, 東京大学出版会, 2004 年
史談会編『史談会速記録』複製版, 原書房, 1971~1976 年
島津公爵編輯所編『島津久光公実記』7, 島津公爵家編輯所, 1910 年
島津頭彰会編『島津歴代略記』, 島津頭彰会, 1986 年
島津興業 80 周年記念誌編集委員会編『創立 80 周年記念誌』, 株式会社島津興業, 2002 年
島津出版会編『しらゆき—島津忠重・伊楚子追想録—』, 島津出版会, 1978 年
島津忠重『炉辺南国記』, 鹿児島史談会, 1957 年
島津忠重『はばたき』, 東京書院, 1966 年
秀英舎編『華族名鑑』, 秀英舎, 1900 年
尚古集成館編『島津氏正統系図—島津家資料—』, 島津家資料刊行会, 1985 年
尚友倶楽部・華族史料研究会編『四條男爵家の維新と近代』, 同成社, 2012 年
杉本勝二郎編・重野安禪閣『国の礎—華族列伝—』 上・中・下, 国の礎編輯所, 1892~1895
年
鈴木淳『維新の構想と展開』, 講談社, 2002 年
鈴木淳編著『工部省とその時代』, 山川出版社, 2002 年
石炭鉱業联合会編『石炭鉱業联合会創立十五年誌』, 石炭鉱業联合会, 1936 年
高島弥之助『島津久光公』, 高島弥之助, 1937 年
高橋誠『明治財政史研究』, 青木書店, 1964 年

高村直助『企業勃興－日本資本主義の形成－』、ミネルヴァ書房、1992年

高村直助編著『明治前期の日本経済－資本主義への道－』、日本経済評論社、2004年

武田晴人『日本産銅業史』、東京大学出版会、1987年

多田好問編・香川敬三閲『岩倉公実記』下、皇后宮職、1906年

田中彰『明治維新観の研究』、北海道大学図書刊行会、1987年

谷山市誌編纂委員会編『谷山市誌』、谷山市、1967年

千葉準一・中野常男編著『体系現代会計学 第8巻 会計と会計学の歴史』、中央経済社、2012年

霧見誠良『日本信用機構の確立－日本銀行と金融市場－』、有斐閣、1991年

手島益雄編『浅野長勲自叙伝』、平野書房、1937年

伝田功『近代日本経済思想の研究－日本の近代化と地方経済－』、未来社、1962年

東京海上火災保険編『東京海上火災保険株式会社六十年史』、東京海上火災保険、1940年

東京鉱山監督署編『日本鉱業誌』、大橋新太郎、1911年、〈復刻版〉明治前期産業発達史資料 別冊 68～4、69～1,2 明治文献資料刊行会、1970年

東京国立博物館・東京大学史料編纂所編『時を超えて語るもの』(展覧会図録)、東京大学史料編纂所、2001年

東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所史史料集』、東京大学史料編纂所、2001年

東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』、山川出版社、2003年

東京大学百年史編纂委員会編『東京大学百年史 部局史』1～4、東京大学、1986～1987年

遠山茂樹『日本近代史 I』、岩波書店、1975年

徳富蘇峰『公爵松方正義伝』乾・坤、公爵松方正義伝記発行所、1935年

徳永律編『串木野郷史資料集 3、4 芹ヶ野金山文書集』上・下、串木野古文書研究会、1994年

内藤一成『貴族院と立憲政治』、思文閣出版、2005年

内藤一成『貴族院』、同成社、2008年

中西聡・井奥成彦編著『近代日本の地方事業家－万三商店小栗家と地域の工業化－』、日本経済評論社、2015年

中村徳五郎『島津久光公御事蹟』、出版社不明、19――年

中村尚史『日本鉄道業の形成－1869～1894年－』、日本経済評論社、1998年

中村尚史『地方からの産業革命－日本における企業勃興の原動力－』、名古屋大学出版会、2010年

奈良哲三他編著『戊辰戦争の新視点』上・下，吉川弘文館，2018年

成田龍一『「故郷」という物語—都市空間の歴史学—』，吉川弘文館，1998年

西川正雄・小谷汪之編『現代歴史学入門』，東大出版会，1987年

日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編』3・4，大蔵省印刷局，1957～1958年

日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』1，東洋経済新報社，1971年

日本工業会編著『明治工業史 鉱業篇』，明治工業史発行所，1930年，〈復刻版〉，学術文献普及会，1968年

日本国有鉄道総裁室修史課編『工部省記録』22，日本国有鉄道，1969年

日本史籍協会編『岩倉具視関係文書』1～8（日本史籍協会叢書18～25），東京大学出版会，1968年

丹羽邦男『明治維新の土地変革—領主的土地所有の解体をめぐる—』，1962年，御茶の水書房

農商務省鉱山局『鉱山発達史』I・II，農商務省鉱山局，1900年，〈復刻版〉明治前期産業発達史資料 別冊68-2・3，明治文献資料刊行会，1970年

箱石大編著『戊辰戦争の史料学』，勉誠出版，2013年

旗手勲『日本における大農場の生成と展開—華族・政商の土地所有—』，御茶の水書房，1963年

蜂須賀年子『大名華族』，三笠書房，1957年

原口泉他著『鹿児島県の歴史』，山川出版社，1999年

原口大輔『貴族院議長・徳川家達と明治立憲制』，吉田書店，2018年

広島県『広島県史』近代1，広島県，1980年

深尾京司他編著『岩波講座日本経済の歴史2』，岩波書店，2017年

深谷博治『華士族秩禄処分の研究』，高山書院，1941年

福島正夫『戸籍制度と「家」制度—「家」制度の研究—』，東京大学出版会，1959年

福地桜痴『久光公記』，日報社，1888年

舟橋遂賢『華族論』上，西村由太郎，1889年

フランシスク・コワニエ著・石川準吉編訳『日本鉱物資源に関する覚書』，羽田書店，1944年

文化財建造物保存技術協会編『名勝仙巖園附花倉御仮屋庭園修理工事報告』，島津興業，1987年

本富安四郎『薩摩見聞記』，東洋堂，1898年

マーガレット・メール著・千葉功・松沢裕作訳者代表『歴史と国家—19世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問—』，東京大学出版会，2017年

- 松尾千歳『鹿児島歴史探訪』, 高城書房, 2005年
- 松尾正人『廃藩置県—近代統一国家への苦悶—』, 中央公論社, 1986年
- 松方峰雄他編『松方正義関係文書』1, 6~10, 大東文化大学東洋研究所, 1979, 1985~1989年
- 松沢裕作『明治地方自治体制の起源—近世社会の危機と制度変容—』, 東京大学出版会, 2009年
- 松沢裕作『重野安繹と久米邦武—「正史」を夢見た歴史家—』, 山川出版社, 2012年
- 松沢裕作『町村合併から生まれた日本近代—明治の経験—』, 講談社, 2013年
- 松田敬之『〈華族爵位〉請願人名辞典』, 吉川弘文館, 2015年
- 松本徳太郎編『明治宝鑑』, 原書房, 1970年
- 松山恵『江戸・東京の都市史—近代移行期の都市・建築・社会—』, 東京大学出版会, 2014年
- 三井銀行八十年史編纂委員会編『三井銀行八十年史』, 三井銀行, 1957年, 別編として「十五銀行小史」を収録
- 宮間純一『国葬の成立—明治国家と「功臣」の死—』, 勉誠出版, 2015年
- 明治財政史編纂会編『明治財政史』13, 明治財政史発行所, 1927年
- 森岡清美『華族社会の「家」戦略』, 吉川弘文館, 2002年
- 保田孝一『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記 増補』, 朝日新聞社, 1990年
- 山ヶ野小学校史編集委員会編『山ヶ野—小学校九十年史・金山三百年史—』, 山ヶ野小学校史編集委員会, 1973年
- J・ヒルシュマイヤー・由井常彦『日本の経営発展—近代化と企業経営—』, 東洋経済新報社, 1977年
- 横川町史蹟保存会編『横川町郷土史』, 横川町教育委員会, 1958年
- 吉川重吉著, 尚友倶楽部史料調査室・内山一幸編『吉川重吉自叙伝』, 芙蓉書房出版, 2013年
- 吉野鉄拳禅『日本富豪の解剖』, 東華堂, 1915年
- 米村千代『「家」の存続戦略—歴史社会学的考察—』, 勁草書房, 1999年
- 立教大学日本史研究会編『大久保利通関係文書』1~5 復刻版, マツノ書店, 2008年

論文

- 阿部安積・伊地知清彦「山ヶ野金山に於て鍍銀銅板混汞收金法に際し気温の高低に依る採收成績の異なる理由に就て」, 『日本鉱業会誌』31(360), 1915年
- 井奥成彦「勲功華族仁禮景範家の塩業経営」, 『史学』(三田史学会) 81(1・2), 2012年

- 池田さなえ「明治二〇年代における皇室財産運営の特徴及びその変容－御料鉱山を素材として－」, 『史林』 97(5), 2014年
- 池田さなえ「近代皇室の土地所有に関する一考察－北海道御料地除却一件を事例として－」, 『史学雑誌』 125(9), 2016年
- 池田さなえ「明治二四年の皇室会計法制定－『御料部会計ノ部』の全章修正」, 『日本歴史』 816, 2016年
- 石井寛治「成立期日本帝国主義の一断面－資金蓄積と資本輸出－」, 『歴史学研究』 383, 1972年
- 石川邦夫「袖ヶ崎雑記」, 『清泉文苑』(清泉女子大学人文科学研究所) 3, 1986年
- 石川健次郎「明治前期における華族の銀行投資－第15国立銀行の場合－」, 『大阪大学経済学』 22(3), 1972年
- 石川健次郎「華族資本と士族経営」, 由井常彦編著『日本経営史講座』 2, 日本経済新聞社, 1976年
- 伊丹正博「第五国立銀行の史的研究－士族銀行の特殊型として－」, 『経済学研究』(九州大学経済学会) 25(2), 1959年
- 伊丹正博「明治中期における第五国立銀行の性格について」, 『鹿児島経大論集』 1(3), 1961年
- 伊丹正博「明治期銀行史における士族銀行の問題－第五国立銀行の特殊な性格について－」, 『鹿児島経大論集』 3(2), 1963年
- 伊丹正博「創設期第五国立銀行の史的研究－島津家との関係とその士族銀行的性格をめぐって－」, 秀村選三編著『薩摩藩の構造と展開』, 西日本文化協会, 1976年
- 今村直樹「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」, 『永青文庫研究』(熊本大学永青文庫研究センター) 創刊号, 2018年
- 伊牟田敏充「華族資産と投資行動－旧大名の株式投資を中心に－」, 『地方金融史研究』 18, 1987年, 渋谷隆一他編著『地方財閥の展開と銀行』(日本評論社, 1989年)に所収
- 岩井忠熊「華士族制度の展開－近代天皇制の成立と身分制の再編－」, 藤井松一他編著『日本近代国家と民衆運動』, 有斐閣, 1980年
- 岩井忠熊「成立期近代天皇制と身分制－華士族制度を中心として－」, 『日本史研究』 211, 1980年
- 岩川拓夫「官有期の『集成館』」, 『尚古集成館紀要』 9, 2010年
- 植田晃一「クルト・ネッター氏冶金講義録にみる明治初期の山ヶ野金山 ペー・オジェによる近代化試験」, 『資源・素材』 1989, 1989年

- 植田晃一「明治前期我国鉱業近代化とお雇い外人の系譜」、『資源・素材』1990, 1990年
- 植田晃一「涅氏冶金講義録にみる明治初期の山ヶ野金山」、『資源・素材学会講演要旨集』, 1990年
- 植田晃一「山ヶ野金山における搗鉱混汞法の起源」、『資源・素材学会研究・業績発表講演会講演要旨集』1991, 1991年
- 植田晃一「仏人技師P. オジェと山ヶ野金山の近代化 カリフォルニアでの研修と日本到着」、『資源・素材』1991, 1991年
- 植田晃一「山ヶ野金山における蒸気機関の起源について」、『資源・素材学会研究・業績発表講演会講演要旨集』1992, 1992年
- 植田晃一「明治期山ヶ野金山における自稼について」、『資源・素材学会春季大会講演集』1, 2002年
- 内山一幸「旧藩主家における意思決定と家憲—旧柳河藩主立花家を中心に—」、『九州史学』146, 2006年
- 内山一幸「旧藩主家の家政と家令・家扶—旧柳河藩主立花家を事例に—」、『日本歴史』699, 2006年
- 内山一幸「明治二十年代における旧藩主家と地域社会—私立尋常中学橘蔭学館問題を事例に—」、『日本歴史』723, 2008年
- 内山一幸「明治前期における大名華族の意識と行動—立花寛治の農事試験場建設を事例に—」、『日本史研究』576, 2010年
- 内山一幸「新たな大名華族像を求めて」、『九州史学』159, 2011年
- 内山一幸「育英組織の設立をめぐる郡と旧藩—橘蔭会を事例に—」、『地方教育史研究』34, 2013年
- 内山一幸「大名華族の婚姻に関する一考察—明治期の旧柳河藩主立花家を事例に—」、『明治維新史研究』12, 2014年
- 内山一幸「明治十年代における旧藩主家と士族銀行—旧柳河藩主立花家と第九十六国立銀行の関係を事例に—」、『史学雑誌』124(1), 2015年
- 内山一幸「旧誼と朝臣—明治零年代における天皇・華族・士族—」、『日本史研究』655, 2017年
- 浦島幸世「錫山鉱山」、『鹿児島県地学会誌』62, 1989年
- 浦島幸世「山ヶ野、串木野、大口金山—1975年頃までの金鉱探し—」、『地質ニュース』599, 2004年

- 大久保利謙「王政復古史観と旧藩史観・藩閥史観」、『法政史学』12, 1959年, 後に『大久保利謙歴史著作集7 日本近代史学の成立』(吉川弘文館、1988年)に所収。
- 大久保利謙「華族会館の成立－天皇政治支配体制成立期の問題として－」、『駒沢大学史学論集』4・5, 1975年
- 大久保利謙「木戸孝允と華族」、『日本歴史』329, 1975年
- 大久保利謙「版籍奉還の実施過程と華士族の生成」、『国史学』(国学院大学)102, 1977年
- 大久保利謙「島津家編修『皇朝世鑑』と明治初期の修史事業」、『大久保利権歴史著作集7 日本近代史学の成立』, 吉川弘文館, 1988年
- 太田智己「一九三〇～五〇年代の美術史学と歴史学」, 松沢裕作編著『近代日本のヒストリオグラフィ』, 山川出版社, 2015年
- 大庭邦彦「水戸徳川家における家政運営の一断面(1)－大能牧復牧事業を手がかりに－」、『戸定論叢』1, 1990年
- 大庭邦彦「水戸徳川家における家政運営の一断面(2)－大能牧復牧事業を手がかりに－」、『戸定論叢』2, 1992年
- 大橋博「薩藩における金山経営の諸仕法」、『地方史研究』10(1), 1960年
- 大橋博「薩藩金山の研究」、『社会経済史学』27(1), 1961年
- 大原順之介「日向国鉾山概況」、『日本鉱業会誌』2(17), 1886年
- 岡橋保「明治初年の県内経済情勢」, 鹿児島銀行行史編纂室編『鹿児島銀行百年史』, 鹿児島銀行, 1980年
- 小川貴至「幕末薩摩藩における松方正義の役割」、『文学研究論集』(明治大学大学院文学研究科)48, 2017年
- 小川原正道「福沢諭吉の地域開発論と華族－中津・延岡・福岡を例に－」、『九州史学』159, 2011年
- 荻野三七彦「久米邦武と『古文書学』」, 大久保利謙編『久米邦武の研究』, 吉川弘文館, 1991年
- 奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、『日本海域研究』(金沢大学日本海域研究所)37, 2006年
- 奥田晴樹「内田政風と初期石川県」, 加能地域史研究会編『地域社会の史料と人物－加能地域史研究会創立三十周年紀年論集－』, 北國新聞社, 2009年
- 小倉孝治「日向日平銅山」、『博物学雑誌』3(26), 1901年
- 刑部芳則「岩倉遣欧使節と文官大礼服について」、『風俗史学』19, 2002年
- 刑部芳則「明治前期文官大礼服制の実像」、『明治維新史研究』2, 2005年

- 刑部芳則「明治初年の散髪・脱刀政策」、『中央史学』29, 2006年
- 刑部芳則「明治太政官制形成期の服制論議」、『日本歴史』698, 2006年
- 刑部芳則「京都公家華族の生活と政治意識－講習所を中心に－」、『地方史研究』57(3), 2007年
- 刑部芳則「栄典制度の形成過程－官僚と華族の身分再編を中心に－」、『日本史研究』553, 2008年
- 刑部芳則「廃藩置県後の島津久光と麿香間祇候」、『日本歴史』718, 2008年
- 刑部芳則「麿香間祇候の歴史編纂事業」、『日本歴史』734, 2009年
- 刑部芳則「京都公家華族の負債問題」、『地方史研究』64(5), 2014年
- 刑部芳則「武家華族の御家騒動－松平忠和と島原騒動を中心に－」、『明治維新史研究』12, 2014年
- 刑部芳則「華族の期待と三条実美の政治行動」、『日本歴史』818, 2016年
- 小田部雄次「1920年代における華族世襲財産の変様－華族世襲財産に関する新資料を中心に－」、『日本史研究』288, 1986年
- 落合弘樹・日比佳代子・鈴木拳『『内藤家文書近代史料』の調査にあたって』、『明治大学博物館研究報告』11, 2006年
- 落合弘樹「廃藩置県と明治維新」, 明治維新史学会編『明治維新史研究の今を問う－新たな歴史像を求めて－』, 有志舎, 2011年
- 樫山和民「有司専制政権と島津久光」、『書陵部紀要』23, 宮内庁書陵部, 1971年
- 上村文「史料紹介『市来四郎日記』」、『黎明館調査研究報告』17, 2004年
- 川合一郎「明治・大正期における雑誌『歴史地理』」、『歴史地理学』48(4), 2006年
- 川島慶子「明治～昭和初期における島津家の編纂事業」、『東京大学史料編纂所研究紀要』15, 2005年
- 神田礼治「日本鉱業会の創立より今日まで」、『日本鉱業会誌』51(597), 1935年
- 芳即正「明治初期 鹿児島県のお雇い外国人」、『研究年報』(鹿児島県立短期大学地域研究所) 6, 1978年
- 芳即正「島津斉彬の写真撮影に関する新史料」、『尚古集成館紀要』6, 1993年
- 芳即正「島津久光の官位叙任問題－NHK説を検証する－」、『地域・人間・科学』(鹿児島純心女子短期大学江角学びの交流センター地域人間科学研究所) 5, 2001年
- 狐塚裕子「仙台藩大崎袖ヶ崎屋敷の終焉、そして島津家へ」、『清泉文苑』(清泉女子大学人文科学研究所) 32, 2015年
- 狐塚裕子「もう一つの島津公爵家袖ヶ崎本邸－まぼろしの和館－」、『清泉文苑』33, 2016年

- 楠本美智子「公財産から私財産へー旧正規福岡藩家老三奈木黒田家の場合ー」、『九州文化史研究紀要』39, 1994年
- 久保正明「華族会館創設時における会館の内部事情」、『愛知学院大学大学院文学研究科文研会紀要』8, 1997年
- 久保正明「華族の論理と行動についての一考察（Ⅰ）（Ⅱ）ー『部局長ー宗族制』形成過程の検討を通じてー」、『政治経済史学』515・516, 2009年
- 久保正明「明治十四年政変後の華族の立憲制への対応ー華族制度形成に関する一考察ー」、『九州史学』157, 2010年
- 久保正明「華族会館創設過程における華族結集の論理」、『年報近現代史研究』3, 2011年
- 久保正明「華族制度の創出と華族」、『政治経済史学』542, 2011年
- 久保正明「華族令制定後の伊藤博文と華族ーいわゆる『九条建議』問題の検討を通じてー」、『日本歴史』783, 2013年
- 久保正明「明治六年政変後の島津久光派」、『日本史研究』611, 2013年
- 久保正明「【史料紹介】旧越前福井藩主松平家の家と『一族』」、『若越郷土研究』（福井県郷土史懇談会）63(1), 2018年
- 熊澤恵里子「越前松平康荘の英国留学と試農場の創設」、『地方教育史研究』34, 2013年
- 後藤靖「日本資本主義形成期の華族の財産所有状況」、『立命館経済学』34(6), 1986年
- 後藤靖「華族世襲財産の設定状況について」、『立命館経済学』37(4・5), 1988年
- 五味克夫「島津忠久画像由来ー伊知地季安関係史料の紹介を中心にー」、『文学科論集（鹿児島大学法文学部）』14, 1978年
- 五味克夫「『島津氏系図について』補考」、『尚古集成館紀要』4, 1990年
- 酒井信彦「本所〔東京大学史料編纂所〕々蔵華族諸家提出の家譜について」、『東京大学史料編纂所報』12, 1977年
- 酒井信彦「『華族類別録』について」、『東京大学史料編纂所報』15, 1980年
- 酒井信彦「『華族明細短冊』をめぐって」、『日本歴史』403, 1981年
- 坂本一登「華族の立憲制への対応と岩倉ー明治一一年華族会館改革運動を中心にー」、『日本歴史』423, 1983年
- 坂本一登「華族制度をめぐる伊藤博文と岩倉具視」、『東京都立大学法学会雑誌』26(1), 1985
- 佐々木克「華族令の制定と華族の動向ー旧華族間の対立をめぐるー」、『人文学報』62, 1987年

- 佐々木克「初期議会の貴族院と華族」、『人文学報』67, 1990年
- 佐々木克「明治維新时期における天皇と華族」、『思想』789, 1990年
- 佐藤大悟「修史部局における『府県史料』編纂事業の管理」、『東京大学史料編纂所研究紀要』29, 2019年
- 佐藤大悟「明治太政官期の修史部局における記録管理－『修史局・修史館史料』の分析から－」、『国文学研究資料館紀要. アーカイブズ研究篇』15, 2019年
- 佐藤雄基「明治期の史料探訪と古文書学の成立」, 松沢裕作編著『近代日本のヒストリオグラフィー』, 山川出版社, 2015年
- 澤大洋「英国華族等留学生と会話社・通款社の創建及び華族会館の成立」, 東海大学外国語教育センター異文化交流研究会編『日本の近代化と知識人－若き日本と世界Ⅱ－』, 東海大学出版会, 2000年
- 島津修久「故田実勇館長代理の遺稿『北海道開拓と島津農場』について」、『尚古集成館紀要』2, 1988年
- 新福大健「玉里島津家の家政改革－『御変革一卷』を中心に－」、『黎明館調査研究報告』24, 2012年
- 新見吉治「両敬と片敬」、『日本歴史』81, 1955年
- 菅原亮芳「明治期民間育英奨学事業の一断面－旧藩系主体の団体をめぐって－」、『地方教育史研究』14, 1993年
- 鈴木正幸「華族制をめぐる若干の問題」、『日本史研究』211, 1980年
- 瀬戸口龍一「明治期における井伊家と士族たち－『相馬永胤日記』から見る彦根藩士族たちの動向－」、『専修大学史紀要』7, 2015年
- 千田稔「華族資本の成立・展開－一般的考察－」、『社会経済史学』52(1), 1986年
- 千田稔「華族資本としての侯爵細川家の成立・展開」、『土地制度史学』29(4), 1987年
- 千田稔「華族資本の成立・展開－明治・大正期の旧土浦藩主土屋家について－」、『社会経済史学』55(1), 1989年
- 園田英弘「華族論」、『日本研究』16, 1997年
- 高村直助「企業勃興期における紡績業の構造－大阪紡績会社の成立－1, 2」, 『史学雑誌』72(8・9), 1963年
- 武田晴人「明治前期の藤田組と毛利家融資」, 『経済学論集』(東京大学経済学会) 48(3), 1982年

田実勇「故田実勇館長代理遺稿(未完) 北海道開拓と島津農場」, 『尚古集成館紀要』2, 1988年

田村省三「明治十七年磯別邸の改築工事について」, 『尚古集成館紀要』1, 1987年

筑波常治「島津久光論－革命における旧支配層開明派の役割－」, 思想の科学研究会編『明治維新』, 徳間書店, 1967年

土田美緒子「資料紹介「御数寄御成の記」(仮題)」, 『尚古集成館紀要』4, 1990年

寺尾美保「明治大正期の島津家について－明治三十二年・大正十年の『職制』を中心に－」, 『尚古集成館紀要』6, 1993年

寺尾美保「島津家と第十五国立銀行休業問題に関する一考察－華族の資産運用と顧問制度の関係－」, 『尚古集成館紀要』7, 1994年

寺尾美保「島津家の世襲財産」, 『鹿児島歴史研究』創刊号, 1996年

寺尾美保「明治十年代の島津家の家政運営と財政事情」, 『尚古集成館紀要』8, 1996年

寺尾美保「『家藩』についての一考察」, 『鹿児島歴史研究』2, 1997年

寺尾美保「史料掛が語る島津家の史料管理について－聞き取り調査報告－」, 『鹿児島歴史研究』3, 1998年

寺尾美保「島津家の編集方について－島津家の家政との関わりを中心に－」, 『鹿児島歴史研究』4, 1999年

寺尾美保「『鑛業館一卷』にみる佛人技師ペー・オジエ来日の四年間について」, 『鹿児島歴史研究』5, 2000年

寺尾美保「公爵島津家の編纂事業と家政事情」, 明治維新史学会編『明治維新の新視角』, 高城書房, 2001年

寺尾美保「近代の鹿児島と海」, 尚古集成館編『海洋国家薩摩－海が薩摩にもたらしたもの－』(尚古集成館「海洋国家薩摩」特別展図録), 尚古集成館, 2004年

寺尾美保「尚古集成館の歩み」, 尚古集成館編『海洋国家薩摩 2－失われた琉球船復元－』(尚古集成館「平成の大改修」特別展図録), 尚古集成館, 2005年

寺尾美保「明治初期の島津家と鹿児島県について－明治十年・十一年大蔵省鹿児島査察の顛末－」, 『想林』1, 2010年

寺尾美保「島津家家令としての内田政風と東郷重持」, 『尚古集成館紀要』11, 2012年

寺尾美保「明治十七年磯邸建替と公爵島津忠義の貫属換について」, 『尚古集成館紀要』13, 2014年

寺尾美保「大名華族資本の誕生－明治前・中期の島津家の株式投資を通じて－」, 『史学雑誌』

124(12), 2015年

寺尾美保「明治期島津家における家史編纂事業—大名華族による『国事鞅掌』始末取調—」, 松沢裕作編著『近代日本のヒストリオグラフィー』, 山川出版社, 2015年

寺尾美保「明治十年・二十年代に於ける島津家の会計管理」, 『尚古集成館紀要』14, 2015年

寺尾美保「明治二〇年代の予算検討書類にみる島津家の会計管理」, 『尚古集成館紀要』15, 2016年

寺尾美保「書評 内山一幸著『明治期の旧藩主家と社会—華士族と地方の近代化—』」, 『明治維新史研究』14, 2017年

寺尾美保「書評 久保正明著『明治国家形成と華族』」, 『史学雑誌』126(11), 2017年

寺尾美保「第十五国立銀行株主姓名表の検討」, 『政経論叢』(明治大学)87(1・2), 2019年

内藤一成「有爵議員互選選挙をめぐる貴族院の会派と華族—大正期の『研究会』を中心に—」, 『九州史学』116, 1996年

内藤一成「貴族院における山県系の結集と貴族院糾合運動—幸俱樂部結成とその周辺—」, 『ヒストリア』160, 1998年

内藤一成「貴族院における華族の『本分』の追求と実践—研究会『是々非々主義』の形成と展開—」, 『書陵部紀要』51, 1999年

内藤一成「大名華族と旧臣会をめぐる若干の考察」, 『九州史学』159, 2011年

内藤隆夫「明治期佐渡鉱山の製錬部門における技術導入」, 『経済学研究』(北海道大学大学院経済学研究科)62(3), 2013年

中西聡「地方資産家の投資行動からみた近代日本—資産家資本主義の生成—」, 『三田学会雑誌』108(4), 2016年

中村政則「日本資本主義確立期の国家権力」, 『歴史学研究』1970年度大会別冊特集, 1970年

中山正信「日向国日平銅山略記」, 『日本鉱業会誌』6(67), 1890年

西尾林太郎「島津久光処遇問題と『政体改革』構想—岩倉具視の対応を中心として—(1)・(2)」, 『社会科学研究』(中京大学社会科学研究所)13(1・2), 1993年

西川登「社史に見る西洋式簿記の導入」, 『商経論集』(神奈川大学経済学会)31(3), 1996年

西川誠「明治期の位階制度」, 『日本歴史』577, 1996年

野島義敬「大正・昭和期における有馬頼寧と『旧藩地』人脈の形成」, 『九州史学』159, 2011年

箱石大「幕末期武家官位制の改変」, 『日本歴史』577, 1996年

箱石大「維新史料編纂会の成立過程」, 『栃木史学』15, 2001年

- 旗手勲「北海道における大土地所有と大農場経営－華族前田農場の集約的畜産と小作制－」,
『社会経済史学』29(6), 1964年
- 浜野潔「勲功華族の農場経営とその継承－海軍中将・仁禮景範の家族史－」,
『史学』81(1・2),
2012年
- 原口大輔「ワシントン会議前後の徳川家達とその政治的位置」,
『九州史学』168, 2014年
- 原口大輔「徳川家達と大正三年政変」,
『日本歴史』805, 2015年
- 原口大輔「憲政常道期の貴族院議長・徳川家達」,
『九州史学』173, 2016年
- 原口大輔「貴族院議長・近衛篤磨と貴衆両院関係の岐路」,
『日本歴史』834, 2017年
- 原口大輔「明治期の静岡育英会－徳川宗家・旧幕臣・旧静岡藩－」,
『渋沢研究』31, 2019年
- 伴五十嗣郎「中根雪江の修史活動－「昨夢紀事」「再夢紀事」の成立を中心として－」,
『神道史研究』26(4), 1978年
- 日比野利信「書評 内山一幸著『明治期の旧藩主家と社会－華士族と地方の近代化－』」,
『九州史学』179, 2018年
- 平下義記「明治の中の『旧藩』－明治二四～二六年旧福山藩領『義倉事件』の分析－」,
『史学研究』287, 2015年
- 平野成美「島津家への伊勢流故実の相伝過程について」,
『尚古集成館紀要』4, 1990年
- 広田暢久「毛利家編纂事業史」其の一～其の四,
『山口県文書館研究紀要』3・6～8, 1974・1979
～81年
- 福元啓介「文化・文政期における鹿児島藩の藩債整理－鴻池との関係を中心に－」,
『論集きんせい』38, 2016年
- 福元啓介「近世後期における薩摩藩の財政構造とその特質－米収支をめぐって－」,
『東京大学日本史学研究室紀要』22, 2018年
- 福元啓介「安政期薩摩藩の財政と山産物仕法－日州御手山を中心に－」(平成30年度明治維新
150周年若手研究者育成事業研究報告), 『明治維新150周年若手研究者育成事業研究成果報告
書』, 鹿児島県, 2019年
- 福元啓介「薩摩藩の財政・経済政策と明治維新－御宝蔵格護金をめぐって－」(平成28年度明
治維新150周年若手研究者育成事業研究報告), 『明治維新150周年若手研究者育成事業研究成
果報告書』, 鹿児島県, 2019年
- 藤方博之「明治期佐倉における旧藩主堀田家の活動－教育・産業分野を中心に－」,
『地方教育史研究』34, 2013年

藤田讓治「明治国家における位階について」、『人文学報』（京都大学人文科学研究所）67, 2013年

藤田英昭「北海道開拓の発端と始動－尾張徳川家の場合－」、『徳川林政史研究所研究紀要』44, 2010年

藤田英昭「大正・昭和初期における徳川農場の理念と実践」、『徳川林政史研究所研究紀要』47, 2013年

古川常深「明治初期第五国立銀行と承恵社の形成過程について－とくに鹿児島県特治の形態を中心に－」, 秀村選三編著『薩摩藩の構造と展開』, 西日本文化協会, 1976年

朴澤直秀『「島津家本」の構成と形成過程』, 『東京大学史料編纂所紀要』8, 1998年

星野誉夫「日本鉄道会社と第十五国立銀行」1～3, 『武蔵大学論集』17(2～6)・19(1)・19(5～6), 1970～1972年

星野尚文「明治初年の藩邸処分に関する基礎的研究－弘前藩を中心に－」, 『東海史学』40, 2006年

星野尚文「府藩県三治体制下の藩邸問題」, 『東海大学紀要』文学部92, 2009年

星野尚文「明治初年藩政改革と公私の分離－厳原藩（対馬藩）を中心に－」, 『東海大学紀要』文学部98, 2012年

前村智子「〈資料紹介〉造士館一卷」, 『尚古集成館紀要』6, 1993年

前村智子「〈資料紹介〉造士館一卷(続)」, 『尚古集成館紀要』7, 1994年

前村智子「－資料紹介－『元高等中学造士館引継并ニ県立尋常中学造士館書類一卷』(一)」, 『尚古集成館紀要』10, 2011年

前村智子「－資料紹介－『元高等中学造士館引継并ニ県立尋常中学造士館書類一卷』(二)」, 『尚古集成館紀要』11, 2012年

前村智子「－資料紹介－『造士館関係資料』」, 『尚古集成館紀要』12, 2013年

前村智子「－資料紹介－島津奨学金関係資料」, 『尚古集成館紀要』13, 2014年

前村智子「－資料紹介－島津奨学金関係資料(二)」, 『尚古集成館紀要』14, 2015年

松尾千歳「島津家武家故実の成立と展開」, 『尚古集成館紀要』4, 1990年

松尾千歳『「明治十六年御家政御改革見込書」について－明治初期の島津家の職制・諸事業－』, 『尚古集成館紀要』6, 1993年

松尾千歳「明治初期の島津家資産をめぐる諸問題－島津家執事方記録の紹介－」, 『尚古集成館紀要』7, 1994年

松尾千歳「明治六年ヨリ同十一年ニ至ル 諸会社届書」、『尚古集成館紀要』8, 1996年

松尾美恵子「大名の殿席と家格」、『徳川林政史研究所研究紀要』昭和55年度, 1981年

松尾美恵子「近世大名の類別に関する一考察」、『徳川林政史研究所研究紀要』昭和59年度, 1985年

松沢裕作「修史局における正史編纂構想の形成過程」, 松沢裕作編著『近代日本のヒストリオグラフィ』, 山川出版社, 2015年

松平(上野)秀治「明治初期大名華族の経済基盤—尾張徳川家の家禄収入—」, 『徳川林政史研究所研究紀要』昭和49年度, 1975年

松平(上野)秀治「尾張徳川家の藩債処分について—木曾材処分に関連して—」, 『徳川林政史研究所研究紀要』昭和50年度, 1976年

松平(上野)秀治「明治初期尾張徳川家の経済構造」, 『社会経済史学』41(5), 1976年

松平(上野)秀治「明治初期尾張徳川家の経営内容」, 『徳川林政史研究所研究紀要』昭和51年度, 1977年

松平(上野)秀治「尾張徳川家の賞典禄収入」, 『徳川林政史研究所研究紀要』昭和52年度, 1978年

松平(上野)秀治「分与賞典禄の研究—尾張徳川家の場合—」, 『学習院史学』14, 1978年

松平(上野)秀治「尾張徳川家の分与賞典禄支給状況」, 『徳川林政史研究所研究紀要』昭和53年度, 1979年

松平(上野)秀治「大名の私的資産に関する一試論」, 『皇學館史学』3, 1989年

松平(上野)秀治「明治期の宗族制と安倍氏」, 『学習院大学史料館紀要』11, 2001年

松村敏「明治前期, 旧加賀藩家老横山家の金融業経営と鉱山業への転換—鉱山華族横山家の研究(1)—」, 『商経論叢』(神奈川大学経済学会)53(1・2), 2018年

松村敏「明治前期における旧加賀藩主前田家の資産と投資意思決定過程—藩政から華族家政へ—」, 『商経論叢』(神奈川大学経済学会)53(1・2), 2018年

三浦壮「明治期における華族資本の形成と工業化投資—旧岩国藩主吉川家の土地・株式投資を事例として—」, 『歴史と経済』57(2), 2015年

三浦壮「日露戦後から昭和恐慌期における華族資本の形成と資産蓄積の経路に関する考察—旧岩国藩主吉川家の資産形成と工業化投資を事例として—」, 『歴史と経済』60(1), 2017年

美濃部達吉「華族制度概説」, 『国家学会雑誌』48(11), 1934年

三宅正浩「近代井伊家の家政機関について」, 『彦根城博物館研究紀要』23, 2013年

山崎一郎「近代における毛利家文庫の形成と萩藩庁文書」、『史学研究』280, 2013年
山崎有恒「官業払い下げをめぐる工部省の政策展開とその波紋－明治初期の官僚と政商－」,
『史学雑誌』102(9), 1993年
山本博文「島津家文書の内部構造の研究」、『東京大学史料編纂所研究紀要』13, 2003年
柳教烈「華族と地域－明治憲法体制期の確立期を中心に－」、『神戸大学史学年報』10, 1995年
柳教烈「明治憲法制定期における華族土着論－青木周蔵の土着論を中心に－」、『ヒストリア』
153, 1996年

論文の内容の要旨

本論文の目的は、明治前中期における華族について、華族を統制する政府の側からではなく、主体となる華族の側から、具体的には島津家を事例とし、社会に位置づく華族の生成と展開の過程について明らかにすることにある。

華族制度の生成と展開については、制度史に関する先行研究により以下のように整理されている。華族は、明治4年の廃藩置県後、東京において一体化が進められて「皇室の藩屏」としての道を進み始めた。10年代後半になると華族令が制定され、勲功華族が加わるようになって華族の範囲が拡大した。世襲財産法による経済的な特権や貴族院議員となる資格等を得た華族は、「特権的な貴族層」となった。

こうした理解の下、華族を総体として捉えて政治的な役割、経済的な役割を追究する研究が蓄積された。近年、個別華族の史料を用いた研究が始まると、制度的には絶たれたはずの旧領地との関係に注目が集まるようになり、これを大名的な側面の継続として重視する研究も増えた。しかし、個別華族の研究は限られており、個別の事例を束ねて総体としての華族を理解するには至っていない。このため、現状においては、個々の華族を深く検討することはなお必要であり、個別の事例を総体としての華族論に照らしながら検討し、同時期の社会の中に「華族」を位置づけていくことが課題であると考えられる。

そこで本論文では、従来は別々に研究されることの多かった、政治的側面・経済的側面・文化的側面を、島津家という一つの「家」を軸にして、島津家の史料を使いながら検討した。島津家の明治期の史料は十分に活用されておらず、現在も整理中である。これらの史料が持つ特徴を捉えながら、史料から浮かび上がる当該期の島津家の問題を本論文の具体的な検討課題とし、先行研究が十分に検討してこなかった点については、総体としての華族に対する考察も加えながら史料に基づく実証的な研究を試みた。

本論文は三部構成となっている。第一部「草創期の華族」は華族という呼称が使われるようになってから10年代前半まで、第二部「大名華族としての島津家の家政改革」は10年代後半から20年代前半、第三部「大名の歴史をめぐる家史編纂と国史編纂」は10年代後半から40年代を扱った。時期区分は、島津家の変化に応じたものである。

第一章「華族という意識の形成」では、華族を統制する明治政府・華族会館に対する島津家の対応について、当主島津忠義と実父島津久光との関係に注目しながら考察した。久光の政府への反発から、華族として東京に集結することを拒み続けた島津家は、11年

に東京に忠義の居館を築き、華族会館に加盟した。第二章「華族にとっての十五銀行開業と投資の原点」では、ほぼ全華族が株主となって開業した第十五国立銀行開業前後の過程を、華族側から再考した。華族へは、督部長岩倉具視を通じ、株式からの配当が秩禄処分による収入の減少を補い、家の存続に繋がるという説得がなされた。開業直後に明治政府に貸し付けた多額の資金は、西南戦争の軍費として使用されたが、同行筆頭株主は忠義であった。第三章「廃藩置県後の島津家と鹿児島県」では、島津家にとっての廃藩置県の再考を試みた。明治初期の島津家には、旧藩主の資産である銀行や鉱山等を一時的に県や職員に経営させているに過ぎないという認識があった。その認識が時代にそぐわないことに気づいた久光は、第三章で考察した第五国立銀行や、第四章「明治初期における島津家の鉱山経営」で考察した鉱山等の権利を主張し始めた。家令の内田政風を通じた県との交渉は十分な結果を得られないままに西南戦争が勃発し、調整不十分のまま、銀行や鉱山等が島津家の資産と確定した。島津家にとっての「廃藩」は、県と切り離された島津家名義の資産を所有することでもあった。このため、いかなる資産を所有すべきか、また、所有する資産を維持し続けるためにどうすれば良いか、これが第二部で考察した10年代後半からの家政改革の課題となった。

第一部では、島津家に華族という意識を形成させる契機となったのは、久光ではなく忠義に与えられた十五銀行の筆頭株主としての立場であったことを指摘した。これにより、島津家は西南戦争において間接的に政府軍の立場にあったこととなり、旧藩主としての立場を決定的に崩壊させたと見做すことができる。

第二部で考察した家政改革では、旧藩士たちが家令・家扶、顧問等の役割で関与した。第五章「明治一〇年代における家政の諸問題」では、改革を求める職員の意見は、華族としての島津家の理念を考えることに通じていたことを示した。しかし、近代化に着手していたものの未だ利益を生まない鉱山事業をいかに処すべきか、職員間の議論だけでは限界もあった。そこで、顧問となった大蔵卿の松方正義により、第六章「松方正義による会計改革」で扱った会計に関する改革や、第七章「島津家における鉱山事業と十五銀行」で扱った鉱山近代化のための借入金返済を経て、鉱山の経営を再開（継続）することを可能にした。第八章「島津家における磯邸（鹿児島）と袖ヶ崎邸（東京）の意義」では、第一章で扱った東京の居館の新築に続く、鹿児島の改築の経緯を検討した。16年の忠義の帰郷には、当初は経費節減の意図があったが、20年に華族の地方貫族が認められると、

島津家は鉾山の経営を理由に、鹿児島貴族となることが認められ、20年代の島津家の家政の中核部分は鹿児島で築かれた。

第二部の検討により、この時期の島津家は、主として十五銀行からの配当で維持されていたことを明らかにした。このことは、島津家が華族としての生活を営んでいたことを意味している。また、財政を逼迫する危険性のある鉾山を維持し、鉾山経営者としての道も模索し続けた。家を維持するためだけであれば、財政が安定していないこの時期に鉾山の経営にまで手を広げることは妥当とは言えない。しかし、島津家の鉾山経営は本論文の検討対象の時代を超え、華族の時代を通じて継続された。鉾山経営者としての島津家の基礎は、当該期に築かれたものである。

第三部で検討する家史編纂事業は、第二部で検討した家政改革の傍ら、島津家が力を注いだ事業である。第九章「旧大名による「国事鞅掌」始末取調」では、21年に宮内大臣から命じられた「国事鞅掌」始末取調によって旧大名の家史編纂が活発になり、編纂員の横の繋がりのために史談会も組織されたことを検討した。この発端を作ったのは島津家であった。幕末維新期の家史編纂は、家の事業に留まらず、国家的な事業としてなされるべきと主張した久光の意志を継いだものでもあったが、これは失敗した。その理由は、多くの家が歴史の叙述ではなく、編纂に必要な資史料の収集から始めたために、終わりが見えなくなったこと、家史編纂は華族全体としての統一性に欠け、一丸となって進めることに限界があったからであった。第十章「帝国大学文科大学史料編纂掛から見る大名華族」の検討からは、地方における重要な史料の所蔵者としての華族、文化的なネットワークの中で一定の役割を担う華族の姿が浮かび上がった。史料編纂掛の採訪に際しては、華族の編纂担当部署や編纂担当者が活躍した。但し、史料の所蔵状況も家毎の差が大きく、史料編纂掛への対応は一律ではなかった。

結論では、「大名華族としての島津家の誕生」を総括した。第一に、島津家にとっての華族の生成と展開の過程は、家史を描き直す過程でもあった。島津斉彬・久光・忠義の三人を維新の功労者とし、その功績故に公爵という高位を得たと位置づけ、西南戦争を語らない島津家の歴史を創り上げた。これは、第一部で指摘した、十五銀行の大株主として政府軍に与したと理解される島津家の歴史とは異なる、「家」の歴史である。

第二に、当該期の島津家は十五銀行の大株主として株式を世襲財産に登録する等、華族としての役割も果たしつつ、鉾山への多額な出資のために不安定となっていた会計の健全化に追われた。それでも島津家は、鉾山の経営を維持した。島津家にとっての鉾山経営

は、この地を統治し続けた島津家の歴史の継承として、旧大名としての役割と、国家の形成に寄与するという華族としての役割の両方を併せ持つ産業であった。このことが、当該期においては、得られる利益以上に重要であった。しかし、鉱山を経営しながら家を維持していくためにはさまざまな課題があり、このために20年以上もの時間をかけて、家政の在り方が模索し続けられたのである。

鹿児島との縁を重視する島津家は、華族を一体として捉える統制にはなじまなかったが、20年代以降の多様な華族を認める社会の中では、一定の地位を得ることが出来た。華族の位置づけは、20年代の前後では変化していたからである。

大名としての長い歴史を持つ華族は、自らの家の歴史を鑑みながら齊家を模索し、旧領地たる地方との関係を再構築することが重要な課題であった。具体的には、地方における産業の経営、地方の歴史を形づくる資史料の蒐集や保存などである。これは大名として築いてきた「家」の歴史に、華族としての新たな時代の役割を紡いでいくための「家」の歴史の継承でもあった。一方、華族を統制する政府の側も、華族を一律のものとして扱うだけではなく、華族に選択肢を与えるようになっていった。これによって、「皇室の藩屏」といった説明だけでは語り尽くせない、地方に一定の存在感を持つ「大名華族」と称すべき華族を誕生させたのではないかというのが、本論文の分析に基づく展望である。